

# 白鷗大学ピア・サポート活動 — 10年間の歩み —

伊 東 孝 郎<sup>1</sup>

## 1. はじめに

2004年に白鷗大学発達科学部、現在の教育学部が新設された。新しい組織というものは、すべての準備が整っていることは稀である。教職員がどれほど熱心に準備し指導しても、入学した学生は手探りで学生生活を送らなければならないことも多く、さまざまな不安や悩みが生じやすかったであろうことは想像に難くない。ちょうどこの年、試行的に学生相談室が開室され、非常勤の臨床心理士が教職員の紹介による来談者に対応するようになった。翌年度より相談室の存在は学生に周知されて、本格的に開室されるようになったものの、当初は利用者数がなかなか上がらなかった。筆者は、教員による学生への個別指導兼相談援助活動であるオフィスアワー制度の導入を同学部に提案し、2004年度後期から同制度が開始され、学生がアポイントメントなしに教員の研究室を訪れることのできる時間帯を、教員が指定して指導や相談対応ができるようなシステムが整った。現在同制度は他学部にも広がっているが、こちらも相談件数はさほど伸びず、相談内容は学業および進路の問題に集中している。

学生にとって、専門家へのカウンセリングあるいは教員への相談は敷居

---

<sup>1</sup> 白鷗大学教育学部  
e-mail : [ito@fc.hakuoh.ac.jp](mailto:ito@fc.hakuoh.ac.jp)

が高く、ニーズはあってもなかなか相談に訪れないという状況があったようである。そのため、第三の相談リソースともいえる学生の力を相談援助に活用することを考え、2005年度から活動の準備を開始した。ピア・サポートと呼ばれるこの活動は、ピア（peer：仲間）による相談援助活動であり、悩みを抱えた仲間に対し、適切な援助スキルを身につけた者が相談や助言を通じて行う支援である。1970年代にカナダで、児童や青年を対象に始まったとされる（Carr, 1988）。日本学生支援機構の調査（2014, 2006）によれば、ピア・サポート活動は2013年現在、全国の44パーセントの大学で実施され、未実施校のうち43パーセントが今後実施したいとしている。しかし、活動の準備を開始した2005年段階での実施率は13パーセントに過ぎず、比較的早い段階で取り組んだといえるだろう。ピア・サポート活動は日常生活上の軽微な悩み事などに対応することを想定した手軽な相談援助活動とはいえ、相手の心の問題に触れる、ある意味危険を伴う活動であり、トレーニングを通じて相手の自己探求や意思決定を可能にするようなコミュニケーション・スキルを学習した学生により、適切なスーパービジョンの下で支援が行われる必要がある。そこで筆者は活動の前年にあたる2005年に、ピア・サポート・スタッフとなるためのトレーニングを希望する学生を募集した。条件は、2年生以上で、同活動に興味があり、長期のトレーニングに耐え得る心身ともに健康な学生であること。守秘義務を果たせること。そして翌年度にピア・サポート活動を行う意思があること。2年生以上としたのは、大学生生活にすでに適応していることが重要だと考えたからである。申し出た8名の学生にトレーニングを開始し、全過程を終えた7名がスタッフとなって、2006年に白鷗大学ピア・サポート相談室という愛好会を立ち上げ、ピア・サポート活動がスタートした。臨床心理士でもある筆者は、事前のトレーニングを担当するとともに、スーパーバイザーとして活動に関わっていった。導入前の準備として、同制度をすでに導入していた国内外の大学を訪問して担当の教職員や学生と意見交換を行い、制度、活動方針、トレーニングのあり方など、同活動の根幹につい

て、多くのことを学んだ。その経緯は伊東（2011）に詳しい。

そして10年が経過した。本稿は、白鷗大学における10年間のピア・サポート活動の記録である。

## 2. トレーニング

トレーニング生の年度別人数は、表1の通り。

トレーニングの内容についてはほとんど変わっていない。スタッフになるための募集に応じた学生は、1年間にわたって以下の内容のトレーニングを受けることになった。各回50～90分間、年間20回程度のトレーニングである。

前期は「ピアヘルパー・ハンドブック」（日本教育カウンセラー協会、2001）を読み、ピア・サポートの精神を学んだ。その中で、ピア・サポートの関係は「旅の道づれ」として①話し相手になること、②荷物番をしたり荷物を背負ってあげたりすることであると理解した。

後期は実際の相談援助活動の模擬練習として、ロールプレイを行った。これはサポートする側とされる側に分かれ、その役割を演じることで、机上の学習では得られない技法を体得するトレーニング方法である。ロールプレイの様子は2方向からビデオで撮影して1画面の左右に同時に映るよう合成録画し、その後それを見ながらふり返りを行った。（写真1）ふり返りの際のポイントは、主訴の確認、サポートする側の表情や視線、姿勢、言葉かけ、うなずきや繰り返しといった技法、対応のオプションなどである。サポートする者だけでなく、サポートされる者、そしてそれを観察する者も、こうしたふり返りのプロセスを通してさまざまな技法を身につけ、自己理解につながる多くの気づきを得ることが期待された。

表1：トレーニング生の年度別人数

2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	合計
8	4	3	7	3	3	10	4	9	4	9	64



写真1：ロールプレイの合成映像

なお、トレーニングにおけるオリエンテーションは、受容と共感を旨とするパーソン・センタード・アプローチに近いものである。やみくもに問題の解決を目指すよりも、相手の気持ちになって理解すること、ともに考えるという基本姿勢で接することを重視した。

毎年12月から1月のピア・サポート相談室開室日の数回にわたり、トレーニングを終えた学生は、スタッフ学生とともにピア・サポート相談室の相談者席に交代で座る。インターンとしてその場に座ることで、さまざまな気づきを得るとともに、先輩であるスタッフ学生から活動に関する具体的な知恵を得ている。

また年度によって、新年度の活動間もない時期に、ピア・サポート・スタッフとトレーニング学生と合同で、筆者がファシリテーターとなって一日がかりのワークショップを行った。対人関係スキルの上達と自己理解を目的とした構成的グループエンカウンターである。臨床心理士を目指して大学院に通う卒業生にも、コ・ファシリテーター（co-facilitator）として参加してもらった。

### 3. 相談援助活動

相談援助活動を行う場所は、当初空き教室でスタートしたもの、後述

するように、その後図書館前のオープンスペースで実施するようになった。衝立を置いて、相談者のプライバシーに配慮しつつ、週に1～2度、各回2～3時間程度、開室している。(写真2・3)

開室状況は表2、図1・2の通り。2011年度の24日間から2010・2014年度の74日間まで、年度によってかなり幅があることがわかる。ちなみにスタッフの数は表3にある通り、2011年度が4名、2010年度が8名、2014年度が9名である。スタッフの数は、開室日に影響を与えていると考えられる。月別には、年度当初の4月、6月、そして後期スタート間もない10月が多く開室していることがわかる。4月は集中的に開室している年度がある一方、準備が整わずにあまり開けない年度もあった。



写真2・3：ピア・サポート活動（模擬面接）の様子

表2：ピア・サポート相談室 開室日数

	3月	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	計
2006	0	2	3	5	3	0	4	4	3	1	25
2007	2	11	3	5	4	0	10	5	3	2	45
2009	0	3	6	7	2	2	9	6	7	1	43
2010	0	11	9	13	7	4	12	9	6	3	74
2011	0	4	2	6	3	0	3	3	2	1	24
2012	0	7	7	8	6	0	5	7	5	3	48
2013	0	9	5	8	6	0	8	8	6	3	53
2014	0	10	7	13	11	2	12	7	6	6	74
2015	0	9	3	3	4	0	3	4	3	3	32
計	2	66	45	68	46	8	66	53	41	23	418

※ 2008年度は記録なし。

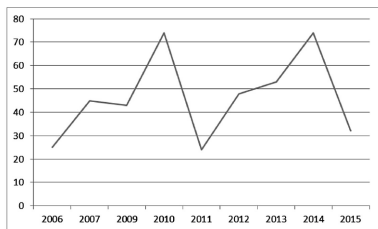


図 1：開室日数の年度推移

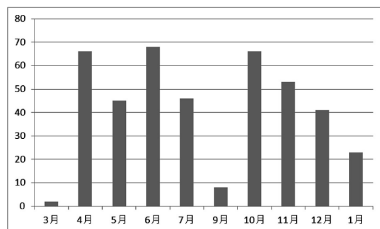


図 2：月別開室日数

表 3：年度別スタッフ学生数

2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	計
7	12	4	7	8	4	10	7	9	7	75

相談件数は、表 4、図 3・4、相談人数は表 5、図 5・6 の通り。この 10 年間で 291 件、426 人の相談を受けたことになる。年度別では 2007 年度の 109 件 155 人が最多、最少は 2015 年度の 4 件。4 月が 207 件と、年度当初のニーズの高さを反映して、全体の 71 パーセントを占めている。

表 4：相談件数

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	計
4月	1	88	68	3	10	4	9	15	6	3	207
5月	1	1	0	1	3	1	4	0	3	0	14
6月	4	3	0	3	2	2	1	0	2	1	18
7月	0	5	0	0	1	1	2	3	3	0	15
9月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10月	0	4	1	1	3	0	1	3	0	0	13
11月	2	7	0	2	2	1	1	2	0	0	17
12月	0	1	0	1	0	0	2	1	1	0	6
1月	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
計	8	109	70	11	21	9	20	24	15	4	291

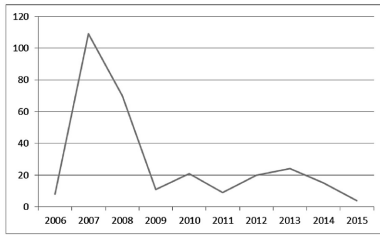


図3：相談件数の年度推移

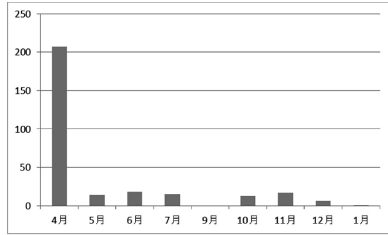


図4：月別相談件数

表5：相談人数

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	計
4月	1	134	111	3	12	12	17	22	10	3	325
5月	1	1	0	1	3	1	4	0	7	0	18
6月	6	3	0	5	2	2	2	0	3	1	24
7月	0	5	0	0	1	1	2	3	4	0	16
9月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10月	0	4	1	2	6	0	1	3	0	0	17
11月	2	7	0	2	2	1	1	3	0	0	18
12月	0	1	0	1	0	0	2	2	1	0	7
1月	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
計	10	155	113	14	26	17	29	33	25	4	426

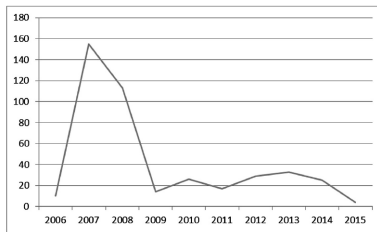


図5：相談人数の年度推移

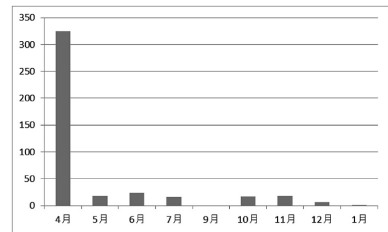


図6：月別相談人数

相談に訪れた学生の学年は、表6、図7の通り。1年生が最多、次いで4年、3年。1年生が多いのは、相談が集中する年度当初に最もニーズが高い学年であるからであろう。またスタッフ学生の知り合いも比較的相談に訪れることが多く、トレーニングを終えてスタッフになれるのは3年生以上であるため、結果的に2年生からの相談が少ない結果となっていると考えられる。

対応について、「情報提供」「案内・リファー」「直接相談」に分類した結果が表7、図8である。情報提供は、施設の場所や簡単な時間割の見方など、必要な情報を与える支援である。案内・リファーは、必要な場所への案内や他の部署・機関への紹介などの支援である。直接相談は、カウンセリングと共通する相談活動で、話を傾聴し、受容・共感を通して一必要ならば助言も行いつつ自己理解や問題解決をとともに考える支援である。直接相談と情報提供が、ほぼ同じ件数となっている。

表6：相談学生の学年

1年	88
2年	6
3年	14
4年	16
不明	183
計	291

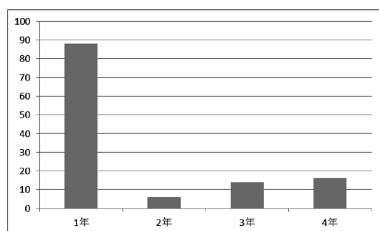


図7：相談学生の学年（不明除く）

表7：対応の内訳

情報提供	122
案内・リファー	39
直接相談	124
不明	6
計	291

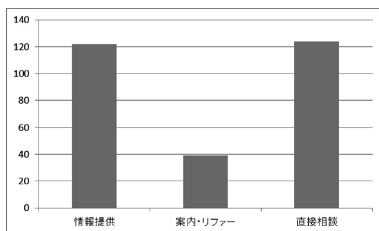


図8：対応の内訳（不明除く）



直接相談の内容について、「人間関係」「学業」「部活・サークル」「施設案内」「資格」「進路・就職活動」「ピア・サポート活動」「その他・不明」に分類した結果が、表8・図9である。人間関係は友人・恋愛などに関するものが多く、資格は教職免許、保育士免許、ピア・ヘルパー資格などが多かった。ピア・サポート活動は、活動そのものへの関心や、スタッフになることを希望する学生の相談などである。件数としては、学業が最も多く、以下、施設案内、部活・サークル、人間関係、その他・不明が続いている。なお、その他に含まれた話題は、学生生活全般やアルバイト、帰省、留学、PCの使用方法、相談室で流れる音楽についてなど、多岐にわたっている。また親の問題、自身の疾病や障がい、不安、震災被害、隣人トラブルなど深刻な問題も含まれており、こうしたケースは専門部署や機関にリファーして対応した。

表8：直接相談の内容

	人間関係	学業	部活 サークル	施設案内	資格	進路就活	ピア活動	その他 ・不明	計
2006	2	1	0	0	0	0	5	0	8
2007	6	55	11	20	6	3	4	4	109
2008	1	39	13	14	3	0	2	2	74
2009	3	1	0	2	1	1	0	2	10
2010	3	4	1	5	2	1	5	1	22
2011	0	1	0	0	0	1	0	4	6
2012	6	7	1	0	3	2	0	4	23
2013	1	4	0	8	0	5	0	6	24
2014	5	0	0	3	1	3	2	2	16
2015	0	0	2	0	0	1	1	2	6
計	27	112	28	52	16	17	19	27	298

※内容が複数の場合、重複してカウントした。

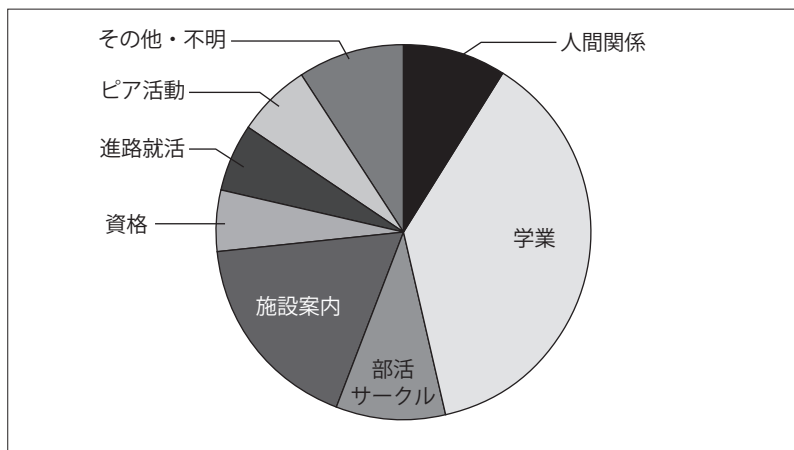


図9：直接相談の内訳

毎月末、スタッフ学生が筆者のもとに集まり、カンファレンスを行っている。その月の相談活動を振り返るとともに、翌月の活動と課題について話し合う。相談事例があった月には、援助方法に関してその対応の是非やオプションについて、筆者とスタッフ仲間によるグループ・スーパービジョンを行い、今後のよりよい相談活動に活かしている。

#### 4. 活動の広がり

当初、学生への相談援助活動のみを念頭においてスタートした活動である。しかし、スタッフ学生の創造性あふれるアイデアによって、さまざまな活動へと広がりをみせていった。また活動そのものだけでなく、彼らの真摯な態度が学内外に伝わったことで、さまざまな活動を依頼されるようになった。

表9の年表は、ピア・サポート活動の広がりを示している。活動初年度である2006年度の相談件数があまり多くなかったことから、学生への告知のためにホームページを開設することを計画し、2007年度に開設した。現在は大学のホームページからもリンクが張られており、月に数度ブログを

表9：ピア・サポート活動 年表

2005	トレーニング開始				
2006	活動開始				
2007	ホームページ開設	新年度集中開室	出張所開設→正規の相談室に	BGM使用開始	ML開始
2008	連絡ノート作成	常時2名体制			
2009	学生対象意識調査	教職員対象意識調査	絵本コーナー設置	学生&企業合同研究発表会発表	
2011	震災被災者援助活動HOPE				
2013	小山城南高校での体験授業	LINE一部開始			
2014	小山城南高校での体験授業	オープン・キャンパスに参加			
2015	小山城南高校での体験授業	オープン・キャンパスに参加	完全LINE化		

更新しながら、ホームページは進化している。また、特に新入生からの相談ニーズが高いと思われる4月に集中的に開室をすることも、2007年度にスタートした。また、当初は空き教室で活動をしていたのだが、さほど深刻な相談は持ち込まれないと分かったため、4月の集中開室は皆の目につきやすい図書館前ロビーというオープンなスペースで、試験的にピア・サポート相談出張所を開設して実施した。そして同年後期からは、こちらを正規の相談室とするに至った。人がいないとホールに声が響いてしまうという難点があったため、活動の際にMDデッキを持参し、BGMを流して会話が目立たないように配慮することとなった。曲は穏やかな曲調のものを中心に、音楽に詳しいスタッフが編集したものを使用している。スタッフ同士の連携を密にするため、メーリングリストの使用もこの頃始まり、最近ではLINEを使用するようになった。2008年度には連絡ノートを作成して、参加しなかったスタッフも情報を共有できるよう工夫した。また、あまり大勢が相談スペースにいるとかえって相談しづらいという意見を採り入れ

て、常時2名体制で相談者を待つこととなった。

2009年度には、ピア・サポート活動が学生や教職員にどのように浸透し、受け止められているか把握するため、意識調査を行った。結果は伊東(2011)に詳しい。この年、多くの学生が足を止めてくれるような方法を考えた結果、見るだけでホッとするような絵本を置いてはどうか、という案が出され、皆で絵本を持ち寄って絵本コーナーを設置した。また同年、コンソーシアムとちぎの学生・企業研究発表会に参加して、「ピア・サポート活動報告書—より良い学校生活を送るための学生による相談活動—」と題する発表を行った。

2011年3月に起こった東日本大震災により、実家が被災した学生も多数いたため、筆者とスタッフ学生とで相談の上、被災した学生同士の交流の場としてグルーブルームHOPE (Hakuoh Open Peer Entrance) を開室し、スタッフ学生に声をかけて、ピア・サポート活動とは別の支援活動を筆者と共同で行った。実はピア・サポート・スタッフ学生にも実家が被災した学生がおり、これもまさにピア・サポート活動といえた。同活動は学生委員会委員の教員にも協力を要請し、各学部の掲示板に告知して実施した。少数ながらも被災学生がHOPEを訪れ、語りの場として活用した。

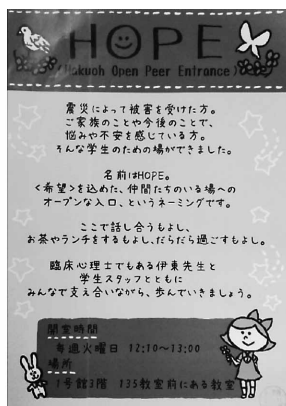


写真4：HOPE 告知ポスター

2013年度より、高大連携校である栃木県立小山城南高等学校からの依頼に応える形で、高校2年生対象の授業「スポーツ概論」の2～3時間、筆者の概説とピア・サポート・スタッフ学生によるトレーニングを実施している。後者は、スタッフ学生自身がピア・サポート・スタッフ養成のために受けたコミュニケーション技法のトレーニングを、高校生向けにアレンジしたものである。詳細は別稿に譲るが、受講した高校生からは概ね好評であり、またスタッフ学生もこの体験からさまざまな学びを得ている（伊東ら，2014）。

2014年度からは、白鷗大学のオープン・キャンパスに参加し、大型ポスターを作成してピア・サポート相談室の存在をアピールし、入学希望者やその保護者に対して活動の説明をした。入学後の学生生活に関して、一種の安心感を与えている。



写真5・6：高校でのピア・サポート・トレーニングの様子



写真7：オープン・キャンパスの様子

## 5. 学生の感想

2015年1月、1年間のトレーニングを終了した学生から、トレーニングについて役に立った点と課題をインタビュー形式で語ってもらった。代表的なものを以下に記す。

### 〈役に立った点〉

- 自分の話す姿や癖を客観的に知ることができた。
- 普段の会話で話を聴く姿勢が変わり、相手をよく見るようになった。
- うなずきなどの技法を意識するようになった。
- 自分の言いたいことをうまく話せるようになった。
- 会話が深まるようになった。
- 実習や授業での発表がうまくできるようになった。

### 〈課題〉

- 相手の話をもっと親身になって聴く。もっと落ち着いて聴く。
- 主訴を正確に理解する。
- 適切な返し方を身につける。
- ボキャブラリーを増やす。
- 考えすぎて思ったことが言えなくなってしまう。
- 柔軟な発想。

映像を通じて自らの話す姿、聴く姿を確認し、よりよい話し方聴き方を意識してトレーニングに臨み、聴き方に関しては一定の効果を実感しているようである。その一方、相手にどう話をするかについては、課題を感じているようだ。確かに数回のロールプレイのみで、悩む相手への声のかけ方を十分身につけることは難しい。こうした高いスキルは、実際の相談援助活動を通じて徐々に身につけていくものだろう。

2013年度および2015年度に活動を終えたスタッフ学生に対しても、活動を通して学んだことを尋ねた。

- 相手に「寄り添うこと」の大切さ。
- 傾聴、聴く姿勢。

- あいずち、間(ま)の大切さ。
- メンバー同士のコミュニケーションの大切さ。
- 先輩から学ぶことができた。
- 相談者から学んだ。
- 自信がついた。
- 成長できた。
- 現場で落ちついていられた。
- 自分について知ることができた。

実際に相談援助活動の場数を踏んだスタッフ学生たちは、トレーニング生に見られたような課題を口にするものはいなかった。先輩や仲間とともに、こうした課題を克服し、多くを学び、自信を持ち、成長したことがうかがえる。

## 6. 考察

2015年、白鷗大学のピア・サポート相談活動は10周年を迎えた。そして2016年度の春には11年目、トレーニング段階からカウントすると12年目を迎える。この間、64名の学生がトレーニングを受け、63名がピア・サポート・スタッフとして、同じ大学生という仲間の相談援助活動に関わってくれた。相談総数291件、一年あたり30件弱という件数は、開室日に比して決して多いとはいえない数字であろう。表面だけをとらえると、さほど相談援助ができていないではないか、という批判も寄せられるかもしれない。しかし、実際には相談に来ないものの、何か困ったことがあった時はピア・サポート相談室に行けばいいと思う学生の存在は、無視できないであろう。やや古くて恐縮だが、2009年に実施した学生対象の調査では、ピア・サポート相談室の必要性について5段階で尋ねているが、回答者183名中「非常に」「まあ」必要と答えた人は130名、71パーセントに上る。一方「あまり」「全く」必要でないと答えた人は8名、4パーセントにすぎなかった。(伊東, 2011) 実際に利用はしていなくとも、いざという時のため

の保険のような存在として、彼らの活動には高い意義があるといえるであろう。

さらにいえば、夏の暑い日も、台風の日も、冬の寒い日も、閑散としたオープンスペースで、いつ来るともしれない悩める仲間を退屈さに耐えてひたすら待ち続けた彼らの努力は、本当に価値のあるものである。学業やアルバイト、交友や趣味の活動で多忙な今どきの大学生が、ボランティアベースでこのように辛い状況に身を置きながら、途切れることなくメンバーを入れ替えつつ10年間も活動を続けてきたことに対して、頭が下がる思いでいっぱいだ。真摯さという資質、人を思いやる優しさにあふれる学生が、この10年間ピア・サポート活動に関わり続けてくれたことは、この世知辛い現代にあって奇跡的なことといっていいただろう。

彼らのエネルギーは、その活動を単なる相談援助活動にとどめることはなかった。先に述べたように、次々と相談環境を整えていった。教室からオープンスペースへの移動も、実際の相談内容を考慮しての変更であったし、BGMの使用も守秘のための工夫であった。情報共有のために、連絡ノートやメーリングリスト、LINEの活用と、ICTの発展に応じてレベルアップさせていった。また自らの活動を、学内外に向けてさまざまな形で発信した。告知のために、ビラやポスター制作だけでなく、ホームページを作成してブログをアップし、絵本コーナーを設けて足を止めてもらう工夫なども行った。またコンソーシアムとちぎの学生&企業合同研究発表会で、広く学外に向けて研究発表も行った。大災害への対応として、通常の活動とは別の活動であるHOPEの運営にも尽力した。効果測定として、学生および教職員を対象とした調査も実施した。さらには大学のオープン・キャンパスにも参加し、近隣高等学校の正規の教育にまで進出した。

新しい試みについて筆者が相談を受けた際、それに待ったをかけたことはまずない。彼ら自身、トレーニングや相談援助活動を通じて、ピア・サポート活動の哲学をしっかりと把握しているため、多岐にわたる新しい活動にも一貫性がある。それは、白鷗大学と近隣地域を生き生きとした温か



い場にするということである。自他尊重というアサーティヴな態度が、そうした結果をもたらす活動を発案させるのであろう。白鷗大学の学生—特に教育学部の学生は、スクールサポート活動や教育実習で、さまざまな教育現場に出かけて行くが、学校を訪問した教職員から、彼らが大変真面目で礼儀正しく熱心だという良好な評価を得たとの報告がなされることが多い。また2015年9月に起こった大水害の際、当初は危険であるために大学構内への立ち入りは禁止とされていたが、大学の復興のために何か手伝えることをしたいと希望する学生が大変多く、結果災害数日後から、連日多くの学生が浸水した物品の整理や清掃等のボランティア活動に尽力した。もちろんこうした現象は、ピア・サポート活動によって直接の影響を受けたものではないだろうが、大学の風土は明らかに良い方向に変化しているし、ピア・サポートもそうした変化の中核の一つとして位置づけることは可能ではないか。

岡山県教育センター（2001）の引用によれば、田邊（2001）はピア・サポートの実践を以下の二つに分類しているという。「ピア・カウンセラー養成型」—ピア・カウンセラーを生徒の中から養成して、実際に生徒の相談活動を担わせるというものと、「コミュニティ育成型」—カタルシスを得られるような受容・支持的雰囲気全体に醸し出して、コミュニティ全体に働きかけていこうという方向性である。白鷗大学の当初の活動目的は明らかに前者であった。しかし、彼らの地道な活動が、結果的に後者が目指す温かいコミュニティの形成を実現し得たといえよう。

学生自身も語っているように、ピア・サポートのトレーニングや活動、スタッフ仲間との信頼関係を通して、自らも学び、成長し、コミュニケーション・スキルを高め、彼らは社会へと旅立っていく。一般企業で、教員や公務員として、臨床心理士として、あるいは親として、進路はさまざまであるが、高いコミュニケーション・スキルを活かして的確に人と関わり、時には相談に応じながら、それぞれの世界で活躍する。白鷗大学のピア・サポート活動は、大学の課外活動が学生のキャリアの充実に役立っている

好例として、特筆に値するかもしれない。

今後も歴代ピア・サポート・スタッフの努力を受け継ぐ、真摯で温かい心もちの学生が現れ、様々な活動を通して白鷗大学と近隣地域をさらに生き生きとした温かい場にしてくれることを心から望む次第である。

最後に、歴代スタッフの氏名を記して、ここに感謝の意を表したい。

一期生	2005	塩澤彩佳	関口昌代	高田裕子	竹内志織	武田麻奈未
		土田修	藤土恵	湯澤絵理		
二期生	2006	伊東和美	鈴木光海	廣田友香	盛岡和栄	
三期生	2007	倉永暢	田窪正子	小荷仁美		
四期生	2008	清水知佳	鈴木悠里	池田睦美	小川未紗	鈴木裕子
		染谷麻理奈	野口真由美			
五期生	2009	中山岬	堀江悠里	伊澤はるか		
六期生	2010	邊見祐香	星静香	皆川恵		
七期生	2011	木村友理佳	束原温子	松永みのり	丸山千尋	宮崎達矢
		村田菜津美	森元千陽	野澤亜衣	横山沙紀	佐藤可奈子
八期生	2012	伊藤真純	加賀爪美保	菅野つくし	大吉花奈	
九期生	2013	鶴飼奈央子	川合亜美	渋谷知里	杉田実冬	山本光弘
		安藤健太	蝦名昂大	河合紅実	村田鞠	
十期生	2014	酒井喜明	杉山広信	高橋智子	渡邊香織	
十一期生	2015	荒川英香	石塚春瑠香	丸山貴則	三田佳緒里	綱将希
		笠井ペロニカ沙織		手塚博子	蛭田郁加	森豪

※年度はトレーニング年

【引用文献】

- Carr R.A. (1988) : The City-wide Peer Counseling Program. Children and Youth Services Review., 10. Pp.217-232
- 伊東孝郎 (2011) : ピア・サポート・スタッフ育成のための体験学習トレーニング方法開発とその効果, ブイツソーリユーション
- 伊東孝郎・横山沙紀・野澤亜衣・加賀爪美保・菅野つくし (2014) : 高等学校におけるピア・サポートを通じたコミュニケーション技法のトレーニング, 白鷗大学教育学部論集 8 (1), Pp.201-225
- 日本学生支援機構 (2006) : 大学等における学生生活支援の実態調査 (平成17年度)  
[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/06/3\\_soudan.pdf](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/__icsFiles/afieldfile/2015/11/06/3_soudan.pdf)
- 日本学生支援機構 (2014) : 大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (平成25年度)  
[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi\\_chosa/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/08/h25torikumi\\_chousa.pdf](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/__icsFiles/afieldfile/2015/12/08/h25torikumi_chousa.pdf)
- 日本教育カウンセラー協会編 (2001) : ピアヘルパー・ハンドブック, 図書文化社
- 田邊昭雄 (2001) : 千葉県高等学校教育研究会 教育相談部会発行予定 高校教育相談17. (未確認) / 岡山県教育センター (2001) : ピア・サポートを高等学校に取り入れるための実践的研究より引用